

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：32683

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22530677

研究課題名(和文)感情状態が自己関連情報の処理過程に及ぼす影響

研究課題名(英文)Effects of affective states on processing of self-relevant information

研究代表者

田中 知恵(Tanaka, Tomoe)

明治学院大学・心理学部・准教授

研究者番号：50407574

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：感情状態が自己関連情報の処理過程に及ぼす影響について検討するため、2つの実験と2つの調査を実施した。その結果、(1) ポジティブ感情状態が、自己の否定的側面に関する情報の探索や処理を促すこと、(2) こうした過程は成長目標への自己制御によって生じること、(3) 他者の情報に対しては上記の効果は認められず、感情不一致な情報に注目した可能性は小さいことが示された。自己制御を組み込んだ感情と情報処理モデルの可能性に関して考察した。

研究成果の概要(英文)：Two experiments and two researches were conducted to examine the effects of affective states on the processing of self-relevant information. The results indicated the following. (1) Positive affective states promoted searching and processing negative aspects of self-relevant information. (2) These processes were mediated by self-regulation for growth goals. (3) These results were not observed for information about others, suggesting the possibility that the effect would be caused by high attention to affect incongruent information would be low. A model of affect and information processing that incorporates the role of self-regulation is discussed.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：社会心理学 社会的認知 感情 自己制御 自己関連情報

1. 研究開始当初の背景

近年の社会心理学、特に社会的認知研究の領域においては、情報処理過程に影響を与える要因として感情の役割に対する注目が高まっている。社会的情報や他者に関する情報を題材とし、無関連感情の働きに関して検討した研究では、ネガティブな感情状態にある場合、ポジティブな感情状態にある場合よりも、対象が精緻に処理されることが多く示されている。これらの結果は、感情が状況のシグナルとして働く (Schwarz, 1990) という機能主義的観点から説明されてきた。

しかしながら、同じ情報でも自己に関連する情報を呈示して検討した場合には、情報の否定的側面に対してはポジティブな感情状態にある場合の方が精緻化するという結果も示されている (Ragunathan & Trope, 2002)。この結果は、シグナルとしての感情の機能によって解釈できず、ポジティブ感情が自己の否定的な側面に関する情報の探索を通じ、改善を可能とする自己制御を促す働きを持つことを示唆している。本研究では、この点に注目し、感情の機能の別側面について明らかにするとともに、その働きが情報処理過程に及ぼす影響について実証的に検討する。

2. 研究の目的

本研究では以下の課題に関して検討する。

(1) 自己関連情報処理時の感情状態の役割に関する検討

自己に対するフィードバック情報の処理に感情状態が及ぼす影響について検討する。特に否定的な自己の側面に関する情報の探索、処理、受容におけるポジティブ感情の働きに注目する。

(2) 目標への自己制御を組み込んだ感情と自己関連情報処理モデルの検討

上記のポジティブ感情の働きが、目標への自己制御過程を媒介することについて検討し、感情の役割に関して包括的に整理する。

3. 研究の方法

本研究では2つの実験と2つの調査という実証的方法を用いて、上記2点の課題について検討した。

(1) 実験を実施し、映像視聴により導出されたポジティブもしくはネガティブな感情状態が自己関連情報の処理に及ぼす影響に関して検討した (研究1)。

(2) 調査を実施し、自然生起した感情状態と自己関連情報への対処に関して検討した (研究2)。

(3) 調査を実施し、研究2で認められた効果が自己改善のために生じている可能性に関して検討した (研究3)。

(4) 実験を実施し、ポジティブ感情による否定的な側面に対する探索が、感情のヴェイレンスと不一致な対象への注目によって生じるといった他の解釈可能性に関して検討した (研究4)。

4. 研究成果

(1) 感情が自己関連情報処理と受容に及ぼす影響に関して

研究1

実験により感情状態ならびに自己関連情報の関与度を操作し、情報への注目の程度に関して検討した。実験には41名 (男性9名、女性32名) の大学生が参加した。

実験参加者にパーソナリティ・テストへの参加を依頼した。その際、テストの概要を大学生向けもしくは高齢者向けと伝えることにより、課題に対する関与度を操作した。続けて別課題として映像刺激を呈示し、ポジティブ感情もしくはネガティブ感情を導出した。次に、実験プログラムによりパーソナリティ・テストの結果を偽フィードバックした。フィードバック情報には、短所ならびに長所に関する項目がそれぞれ5項目ずつ含まれており、興味がある項目に対してはさらに詳しい情報内容を閲覧することが可能であった。実験プログラムによりそれぞれの参加者が各項目や情報を見る順番ならびに注視時間を記録した。最後に質問紙によりフィードバック情報に対する評価を求めた。以下では主な結果を示す。

短所ならびに長所の項目と詳細情報を見た回数を測定したところ、ポジティブ感情条件において長所項目や長所情報よりも、短所項目や短所情報の方が多く探索されていた (図1)。また短所項目や短所情報に対しては、関与度の低い条件の方が高い条件よりも多く探索していた。

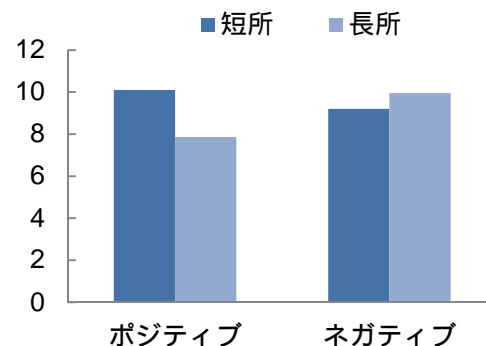


図1. 短所ならびに長所を見た回数 (研究1)

それぞれの項目ならびに情報の注視時間

に関して検討したところ、社会的側面に対する短所情報に対し、高関与条件においてポジティブ感情はネガティブ感情条件よりも注視時間が長かった(図2)。

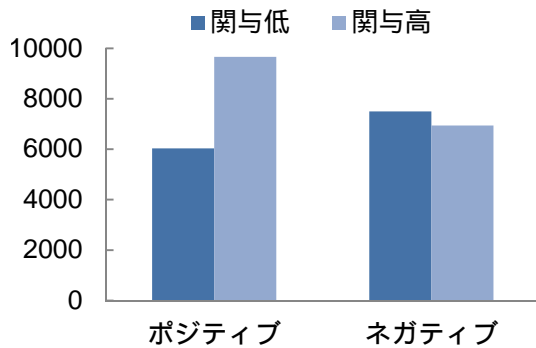


図2 . 社交性側面に対する短所情報の注視時間(研究1)

なお、フィードバックされた情報の評価において、短所に関するフィードバックが自分にあてはまる程度をたずねた項目に対し、ポジティブ感情条件の高関与条件は低関与条件よりもあてはまる程度を高く回答した。

これらの結果は、ポジティブな感情状態にある場合、人が自己の否定的側面に関する情報を探索し、また受容する可能性を示唆するものであった。

(2) 感情が自己関連情報への対処に及ぼす影響に関して

研究2

自然生起した感情状態において、ポジティブ感情状態にある場合にネガティブ感情状態にある場合よりも、短所情報に対処しようとするのか、調査により検討した。調査には101名(男性43名、女性58名)の大学生が参加した。

調査参加者に現在の感情状態に対してたずねた後、親しい人からわるいところ(短所)もしくはよいところ(長所)を言われたとき、どのように対処しようとするか、“わるいところを改めるために努力しようと思う”など短所情報に関して7項目、“よいところを言ってくれるのは自分にとってためになる”など長所情報に関して5項目でたずねた。

その結果、短所情報に対してはポジティブ感情群の方がネガティブ感情群よりも対処得点が高かった。また長所情報に対しても同様の結果が認められた。

これらの結果は、ポジティブな感情状態にある場合、人が自己の成長のために自己関連情報に対処しようとすることを示唆するものであった。

研究3

研究2を追試するとともに、ポジティブ感情による効果が成長の信念によって調整さ

れるか調査により検討した。分析には、調査に参加した大学生153名のうち、すべての項目に回答した150名(男性32名、女性118名)のデータを用いた。

調査参加者に大学入学時から調査実施時までの自伝的記憶を想起するよう教示し、ポジティブ感情もしくはネガティブ感情の導出を試みた。次に、感情状態と自己関連情報の対処に関して回答を求めた。最後に、参加者が成長に対して持つ信念について“自分を変えるために何かに取り組める”など5項目に対してたずねた。

感情操作がうまくいかなかったため、感情状態についてたずねた得点の中位点を用いて感情群とネガティブ感情群に群分けした。また成長の信念についてたずねた得点の中位点を用いて信念高群と信念低群に群分けした。

短所情報に対し、ポジティブ感情群はネガティブ感情群よりも対処の程度を高く回答していた。また信念高群は信念低群より対処の程度を高く回答していた(図3)。

長所情報に対しても、信念高群は信念低群よりも対処の程度を高く回答していた(図4)。

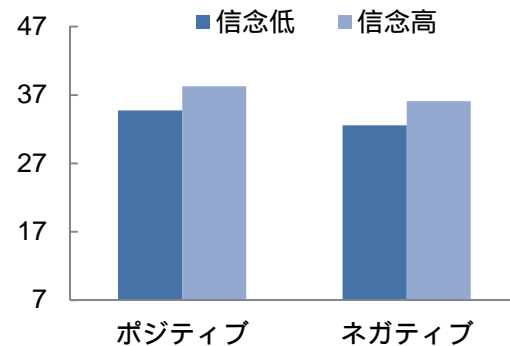


図3 . 短所情報への対処得点(研究3)

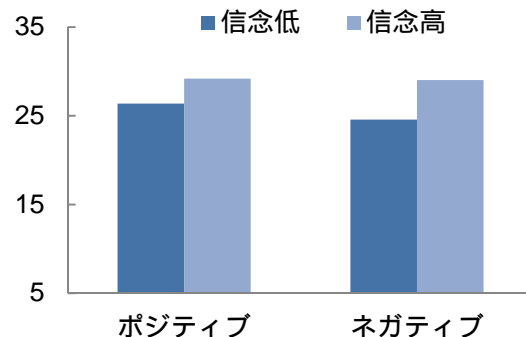


図4 . 長所情報への対処得点(研究3)

短所情報に対する結果から、ポジティブな感情状態にある場合、人は自己の否定的側面である短所情報に対処して成長しようとすることが示唆された。想定していた成長の信

念による調整効果は認められなかった。

(3) 目標への自己制御を促す感情の働きに関して

研究 4

研究 1~3 において認められたポジティブ感情状態にある場合の自己の否定的側面に対する探索や受容ならびに対処が、成長目標への自己制御のために生じているか、実験により検討した。

実験参加者に自己に関連する情報を呈示される自己条件と、親しい他者に対する情報を呈示される他者条件を設け、他者条件では友人同士のペアに実験参加を依頼した。実験には大学生 40 名（男性 16 名，女性 24 名）が参加した。

まず実験参加者にパーソナリティ・テストへの回答を求めた。テストは研究 1 の高関与条件と同様、すなわち大学生向けと教示された。続けて過去半年間の記憶想起によりポジティブ感情もしくはネガティブ感情を導出した。この課題の後、参加者に現在の感情状態に関してたずねる項目への回答を求めた。次に自己条件では自己関連情報、他者条件ではペア相手の情報としてパーソナリティ課題のフィードバックを呈示した。

研究 1 と同様、フィードバック情報には、短所ならびに長所に関する項目がそれぞれ 5 項目ずつ含まれており、興味がある項目に対してはさらに詳しい情報内容を閲覧することが可能であった。実験プログラムによりそれぞれの参加者が各項目ならびに情報を見る順番や注視時間を記録した。最後に質問紙によりフィードバック情報に対する評価を求めた。以下では主な結果を示す。

感情状態についてたずねた項目を足し上げ、感情得点を算出した。この得点に対して感情×対象の分散分析を行ったところ、感情の主効果のみが有意に認められ、ポジティブ感情条件の方がネガティブ感情条件よりも肯定的な感情状態を報告していた。このことから、感情操作は成功したと考えられた。

短所項目の注視時間を測定したところ、ネガティブ感情条件の方がポジティブ感情条件よりも注視時間が長い傾向が認められた。しかしながらこの効果は、感情×対象の相互作用効果に制限される傾向があった。ポジティブ感情条件においては、自己条件の方が他者条件よりも否定的項目の注視時間が長く、対照的にネガティブ感情条件においては他者条件の方が自己条件よりも否定的項目の注視時間が長かった（図 5）。

この結果は、これまでの研究で示された効果が、ポジティブ感情状態にある場合に感情のヴェイレンスと不一致なものに対する注目によって生じた可能性は低いことを示唆している。しかしながら、自己の短所項目の注視時間においてポジティブ感情条件とネガティブ感情条件には想定していた差が認

められなかった。

なお、ポジティブ情報の注視時間においては自己条件の方が他者条件よりも長かった。また短所情報を見た回数においても自己条件の方が他者条件よりも多かった。

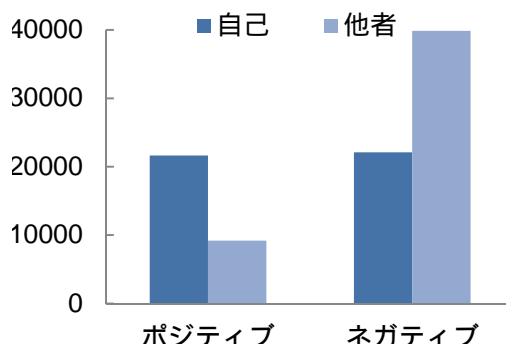


図 5 . 短所項目の注視時間（研究 4）

(4) 研究結果のまとめと今後の課題

4 つの研究を通じ、ポジティブな感情状態にある場合、人は自己の否定的側面に対して探索し、受容することが示唆された。またこうした効果は単に感情状態と不一致なヴェイレンスの情報に注意を向けたことから生じるのではなく、ポジティブ感情による自己改善のための自己制御の働きを示唆するものと考えられた。

しかしながら、上記の効果は一部の指標においてのみ認められたものであり、今後は以下の点に関してさらに検討する必要がある。

第一に、測定方法に対する改善である。研究 1 ならびに研究 4 では、コンピュータの実験プログラムを用いて短所や長所に関する探索や注目に関して検討した。その際、各側面の情報を呈示する位置は実験参加者でカウンターバランスを取ったものの、コンピュータ画面の上部や左側の項目から閲覧されることが多かった。この点に関してはプログラムを改善して再度検討する必要がある。

第二に、測定項目に関する検討である。研究 2 ならびに研究 3 では、感情状態によっていずれかの側面に関する情報への対処の程度が異なるか明らかにするため、よいところ（長所）と悪いところ（短所）に分けて各情報に対する対処得点を求めた。しかしながら両得点間には中程度の相関が認められたことから、いずれの情報も自己の成長のために重要な内容であったため、十分に感情による違いをとらえきれなかった可能性が示唆された。今後はより具体的に“よいところと悪いところのどちらを聞きたいか”といった項目を用い、想定するプロセスに関して明確に検討する必要がある。

また、研究 1 や研究 4 では、情報処理の指

標として長所および短所に関わる項目や情報の探索回数ならびに注視時間を測定した。この方法は、特に研究 4 で検討したように、他者の肯定的・否定的側面に関してどの程度処理しようとするのか質問項目への回答ではうまく測定できないと考えられて用いられたものであった。しかしながら、特定の情報に関して何度も見ることや、長い間注目することは必ずしもその情報を受容したことを意味するものではないだろう。この点に関しては、研究 1 で用いた情報の受容に関する項目等を用いてさらに検討する必要があるだろう。

上述した実証研究の主な結果の一部は、学術論文ならびに学会大会にて報告された。またこれらの研究を遂行するにあたり、感情が自己関連情報処理に及ぼす影響に関してまとめた研究知見の一部は学術図書において報告された。

現在、論文未掲載の研究結果をまとめ、学会誌へ投稿準備中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

田中知恵、経験事象が成長の知覚に及ぼす影響、明治学院大学心理学紀要、査読有、第 23 巻、2013、pp.47-57

田中知恵、感情状態が広告商品評価に及ぼす影響、明治学院大学心理学紀要、査読有、第 21 巻、2011、pp.13-23

〔学会発表〕(計 4 件)

田中知恵、原島雅之、感情状態が自己関連情報の処理に及ぼす影響、日本社会心理学会第 54 回大会、沖縄国際大学、2013

田中知恵、ワークショップ「心理学研究における感情を問う」指定討論、日本心理学会第 75 回大会、日本大学、2011

田中知恵、シンポジウム「態度・行動変容と集団」指定討論、日本グループ・ダイナミックス学会第 58 回大会、昭和女子大学、2011

田中知恵、感情状態が広告商品評価に及ぼす影響、日本心理学会第 74 回大会、大阪大学、2010

〔図書〕(計 5 件)

田中知恵 他、放送大学教育振興会、社会心理学、2014、pp.75-89

田中知恵 他、放送大学教育振興会、社会心理学、2014、pp.112-123

田中知恵 他、放送大学教育振興会、社会心理学、2014、pp.124-135

田中知恵 他、川島書店、心理学 : その応用 : 豊かな社会活動を支えるために、2011、pp.43-56

田中知恵 他、北大路書房、社会と感情(現

代の認知心理学第 6 巻)、2010、pp.98-120

〔翻訳〕(計 1 件)

田中知恵 他、北大路書房、社会的認知研究 : 脳から文化まで、pp.374-393

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 知恵 (TANAKA, Tomoe)

明治学院大学・心理学部・准教授

研究者番号 : 50407574

(2) 研究分担者

原島雅之 (HARASHIMA, Masayuki)

千葉大学・学内共同利用施設等・研究員

研究者番号 : 20466717

(所属先変更のため平成 22 年度より平成 24 年度まで)